松江城の石垣の構造と年代

乗岡　実

はじめに

松江城は関ヶ原合戦後に出雲・隠岐24万石を領有した大名の堀尾氏によって、その居城として築城された。通説によれば慶長12年（1607）に築城が開始され、慶長16年（1611）に落成した。複雑な走行をもった石垣が大量に構築され、天守をはじめとする重厚で瓦葺の城郭建築が林立しており、織豊系城郭ないし近世城郭の典型例といえる。石垣は単独で防禦壁として機能したものもあるが、城郭建築の基礎をなし、直上に建つ城郭建築と組み合って軍事性の高揚を果たしたものもある。いっぽう、曲輪の造成土留めや護岸に関わる土木機能の側面が強いものもあるし、大石を配置するなど視覚的な効果を狙ったとみられるものもある。また石垣は、様々な要因で崩れたり変形することがあって、補修や積み直しが幾度も行なわれたし、築城以後の縄張変更に伴う新規構築もあるから、遺構として残る石垣の現況構造は築城期のものとは限らない。したがって松江城に残る石垣は一様ではなく、機能、配置状況、規模や構造、構築年代は部位によって異なっている。

史跡指定地となっている松江城中枢部の石垣については、松江市教育委員会によって平成24年度から悉皆的な測量調査・台帳作成が進行中である。総合的な評価はそうした基礎資料の蓄積を元に組み立てていくべきであろうが、本稿では、これまでの調査･研究成果や、筆者なりの踏査所見や視点をもとに、構造や年代についての現時点での課題の整理と展望を行なっておきたい。堀尾氏築城期に積まれたとみられる石垣のあり方とその評価に力点をおく。

１．石垣修理の痕跡

⑴　近現代の石垣修理

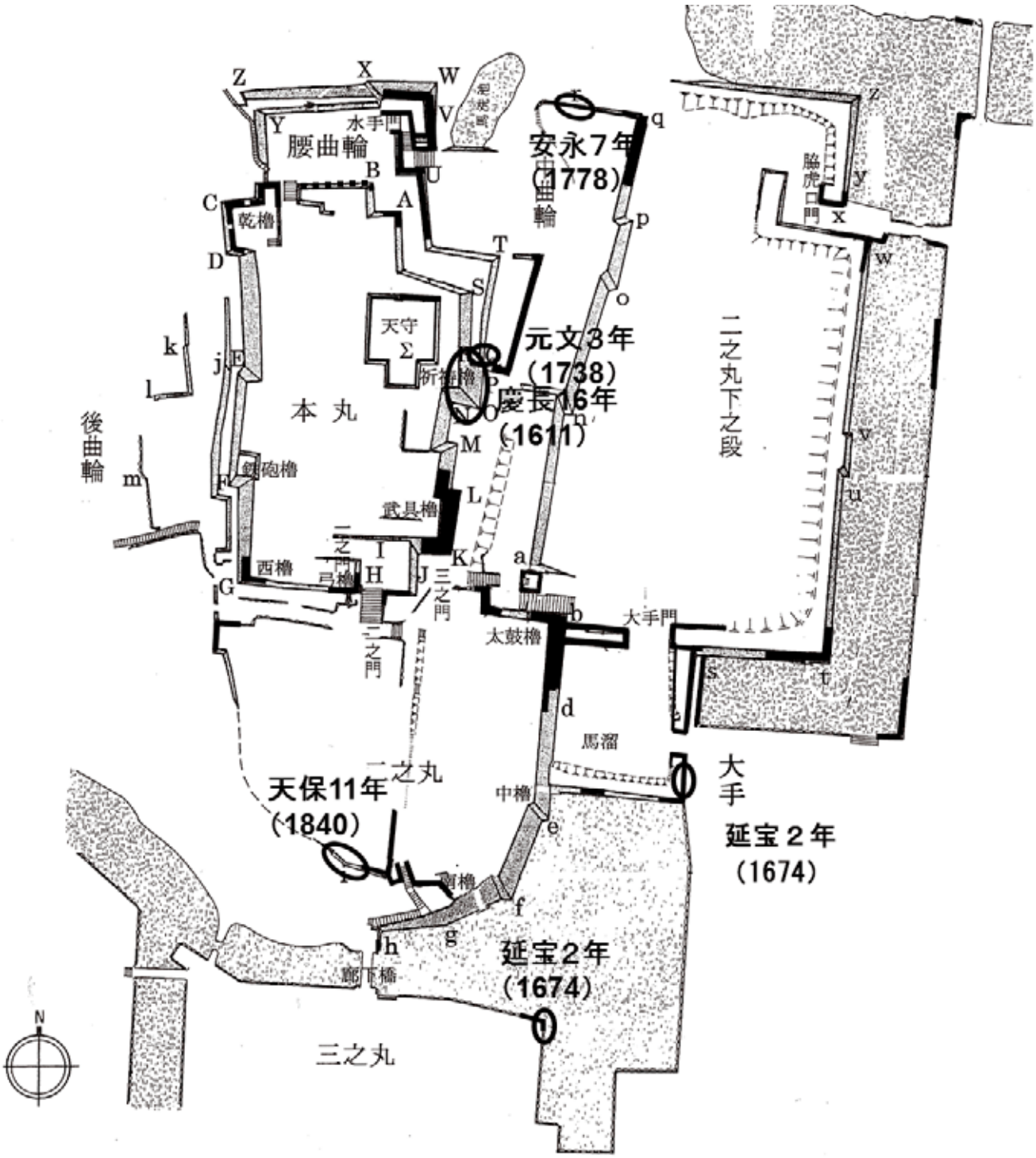
堀尾氏築城期の構造を保つ石垣を抽出し分析するためには、その後に積まれたものを差し引いていく作業が必要である。手始めは、明治以降に積み直された石垣の確認である。近現代の石垣修理は昭和25年から30年に行われた天守の解体修理をはじめとする史跡整備、あるいは危険回避や鳥取県西部地震による崩落を受けた災害復旧などによるもので、近年は特に頻繁に行われている。最近のものは、修理報告書も刊行され[1]、修理工事の範囲や内容、それに解体されたものでも元の構造が明らかであるが、古い修理は不祥なものも多い。平成８年刊行の『石垣調査報告書』[2]に記載された近現代の修理に、その後の修理を加味すると、**図１**に示したようになり、相当広範に及んでいるのが判る。そのほか、直ちには記録として辿れない明治維新～戦前に積み直された個所もありそうである。

［Σ］天守台石垣（符号は**図１・２・４**の位置表示や**表１**などに対応、以下同）は築城期に構築されたことが明らかであるが、現況がどの程度まで当初構造を保っているかは大きな問題である。天守の修理報告[3]によると積み直しが行なわれている。特に北東側では不当沈下による変形が激しかったと報告され、現況観察でも確かに一帯は大規模な積み直し痕跡が確認できる。いっぽう西面などでは、天端付近では沈下幅を調整するための小石積みによる嵩上げないし積替え痕跡が観察できるが、それ以下は大した積み直しを受けていない可能性が窺える。西面や南面、それに付櫓台部に限っての東面について、天守修理前の古写真[4]に写った石垣と現況を比較すると、天端付近以外は良く一致し、仮に積み直しが行なわれたとしても石材の差し替えはなく、現況は修理前の構造を概ね保っていると言えそうである。その

修理個所不明

元禄15年（1702）

正徳 4年（1714）



■＝昭和～平成の修理個所

○＝絵図などの史料にみえる江戸時代の修理個所

図１　江戸時代～平成の記録にみえる石垣修理個所

他、例えば［ａ］中曲輪南端の大手筋に面し分銅文の刻印が多見できる台状石塁は、石材の配置換えを含めて大規模な積み直しによる修理を経ていて[5]、遺構観察時には注意が必要である。

⑵　江戸時代の絵図・古文書に見える修理個所

石垣の崩壊や修理を直に示す史料は、今後の発見も期待されるが、今のところは『石垣調査報告』に記載されている６ヶ所に尽きる（**図１**）。築城に際して構築中の［Ｏ付近］祈祷櫓の石垣が崩れたという『雲陽大数録』の記載事項を最古とし、その後の年代のものは絵図によるもので、石垣の損壊を受けて松江藩が幕府に提出した修理許可申請の付図類である。

６ヶ所のうち、中曲輪北辺では安永７年（1778）の［ｒ］損壊個所付近に「安永八」年銘を刻印した石材が現存し[6]（**図２**）、翌年に修理が実行されたことが裏付けられる。また、二の丸南端付近の天保11年（1840）の修理は、後述する［ｉ］鈍角出隅部付近の現構造に対応すると考えてよい。その他の部位は、史料に示された年代より新しい時期の修理が重複し対比が難しい。なお、部位は特定できないが、『出雲私史』にみる元禄15年（1702）、また正徳４年（1714）にも城内の石垣が損壊した記事があり、それぞれ修理が行なわれたものとみられる。

⑶　江戸時代に積み直された石垣の遺構－新様式の石垣－

次に現に残る遺構から、江戸時代の内で築城期より新しい時期に積まれた石垣の抽出を試みる。［Ｖ］腰曲輪北東部東面（**図９**）ではかつての隅角部を直線部に改造した痕跡が確認できるなど、縄張り変更に伴う新位置での石垣構築も確実にあるが、そうした個所は限定的で、後述する慶長様式の石垣の分布や走行、さらに堀尾期城下町絵図に示された曲輪の配置状況なども総合すると、松江城中枢部の石垣の現況位置や走行は堀尾氏築城期と大局とすれば、あまり変化していないと判断され、ここで記す石垣も近現代の石垣と同じく、先行石垣の修理や補強、あるいは代替物として構築されたものが主体とみられる。遺構に即して言えば、元からある石垣にそのまま連続し、その界線の確認が重要となる。

なお、小規模に崩落した部分を元の石材で戻したような部分修理は様式差としての抽出が難しいし、逆に天端～上部では修理が行なわれた形跡を残す個所、すなわち石材の変化や積み方の乱れなどが随所にあるが、そうした部位は本稿では対象としない。

さて明確な新様式の石垣は次の７ヶ所が指摘できる（**図２**）。いずれも、根本的な修理に関わるものである。

［Ｅ－Ｆ］本丸西辺中部やその下に続く段石垣は、隅石が整った長方体に揃い、長辺／短辺は２程度である。長辺を一段ごとに左右に振り分ける算木積みが徹底し、隅脇石も明確で方形度も高い。隅石のノミ・ハツリ加工は全面に及び、一部の隅脇石も加工度が高い。いっぽう、一般部の築石は面加工のない角ばった石で、一部は幅広の矢穴痕をもち、横積み～乱積みされ、間詰石も伴って、その限りでは築城期の石垣と大差ない。

［ｃ～ｅ］二の丸東辺の高さ12m程で反りをもった石垣も新様式である。中櫓下の鍵折部小口面に下部から上部に及ぶ縦界線が確認され、以南に続く高石垣の積み直しとして構築されたことが判る。北端は近年の修理でさらに積み直されたが、元は太鼓櫓下まで続いていたと見られる。この石垣は、根石ないしは基部の２～３石は石材や積み方が異なる慶長期の構造を残したままに上に付加して積まれている。［ｂ付近］太鼓櫓の下に取り付く大手門脇石塁の解体時に、石塁に覆われた部分でも慶長期の石垣が温存されていることが確認され[7]、築城時の二の丸高石垣、大手門脇石塁、新様式の二の丸高石垣の順に構築されたことは明らかである。［ｅ］隅角の隅石は長方体に近く形・大きさとも良く揃い、ノミによる面加

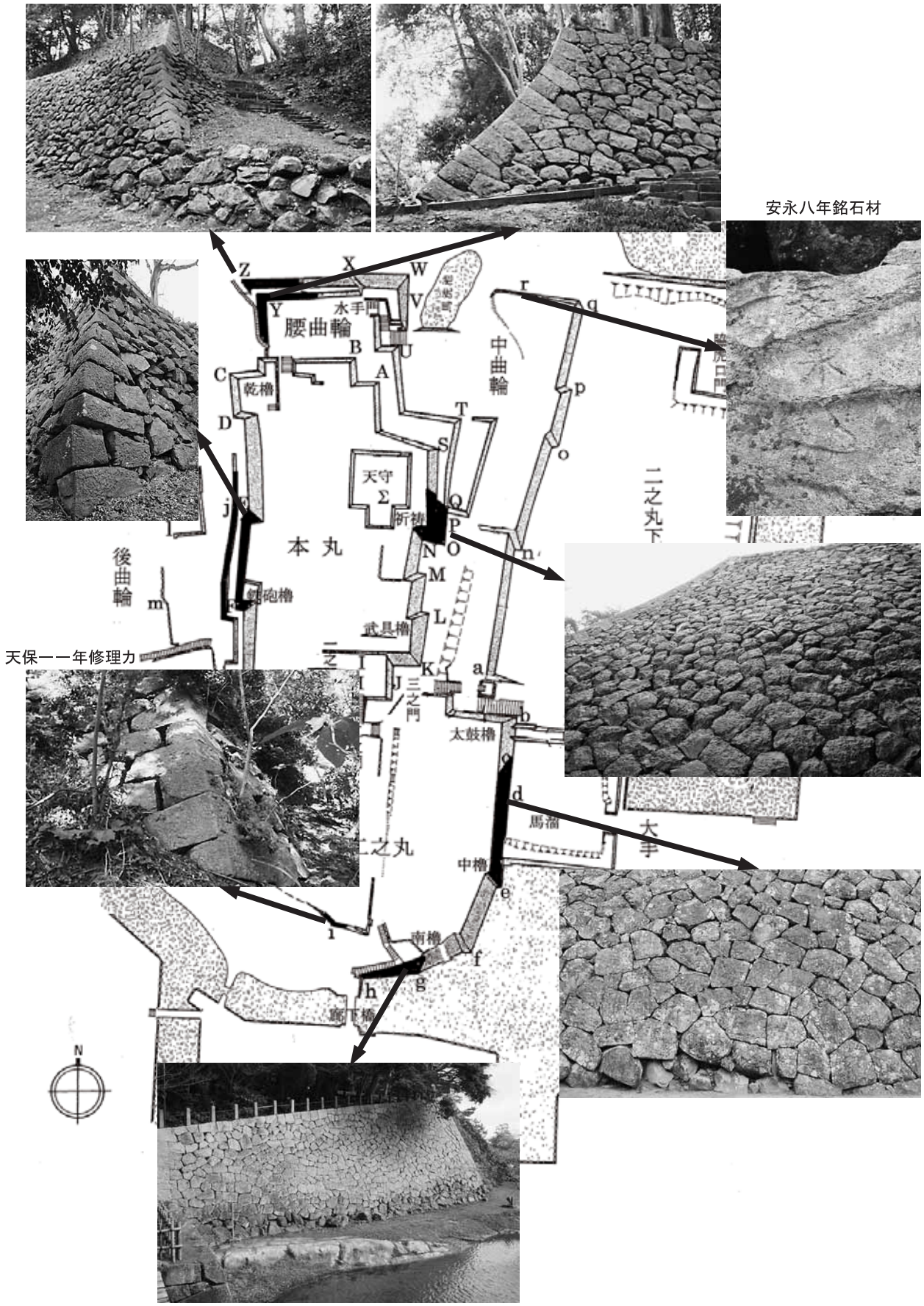


図２　江戸中期～明治の新様式の石垣（改修石垣）

工も顕著で長辺／短辺は２程度である。算木積みが徹底し、隅脇石の存在も明確である。築石の面の加工度も高く、精緻につまれて間詰石も殆んどない。横積み部分もあるが、下の石材間に出来た谷間に上の石の角を合せる、落し積みが多見できる。矢穴幅も６～７㎝と慶長期のものより狭い。

［ｇ～ｈ］二の丸南端の千鳥橋北詰め東の石垣は三之丸から二の丸に至る通路を確保する役割をもち、［ｇ］東方高石垣の隅角に付加する形で構築されている。基底部は石材や積み方が異なり、現況石垣自身が先行石垣の基底を残したまま積み直しが行われた結果の可能性が窺える。そうすると、この付近は三段階に石垣構造が変遷したことになる。［ｈ］西端の隅は算木積みで、隅脇石と合せてノミによる加工度が特に高いが、隅石の長辺／短辺は1.5未満で脇への食い込みが弱い。また［ｈ－ｇ間］東の出隅は鈍角なりに丸く収めるのが特徴である。こうした丸隅は城郭石垣では珍しい。一般部の築石の加工度も高く、緻密に接合して、間詰石がなく、横積み優位で一部で落とし積みを交える。矢穴幅が狭く、島根半島産とみられる緑色凝灰岩を用いる[8]ことも、築城期の石垣との大きな違いである。

［Ｙ］腰曲輪北西隅上段の石垣は高さ４ｍ程度の割には強い反りを持っている。隅石の長辺／短辺は1.2～２弱で、それでも長辺の振り分けが徹底した算木積みである。隅脇石は明確ではないが、築石も加工度も高く、全体が徹底した落し積みとなっている。祈祷櫓台の石垣の次に新相感をもつ。

［Ｚ］腰曲輪北西隅下段の石垣は隅角部の高さは３ｍほどであるが、慶長期とも思える基底部分の上に積み足されたもので、反りを持っている。隅石は長方体の形・大きさとも良く揃い、長辺／短辺は２～３であるが、隅脇石はさほど特化していない。築石は小ぶりのなかで大きさも揃うが加工度は低く、先行石垣からの流用品の可能性があるが、落し積みが基本である。

［ｉ］二の丸の西段南部の隅角付近の高さ３ｍほどの石垣は、隅石と隅脇石の加工度が高く、全面にノミ痕を残している。隅石の長辺／短辺は２程度で、形や大きさも良く揃うが、鈍角の隅角に合せて隅石そのものが鈍角形に整形されているのが特徴で、稜線を美しく通している。史料にみえる天保11年（1840）の修理による構造の可能性が強い。

［Ｎ～Ｑ］祈祷櫓台石垣は最大高11ｍほどの高石垣である。隅石の形が長方体に整い、長辺／短辺は２～３で細長く、算木積が徹底している。隅石に挟まれた隅脇石の存在も明確である。稜線は鋭く、スムーズな曲線の反りをもつ。隅石・隅脇石・一般部築石ともハツリなどによる加工整形が全面に及び、石材同士が石垣面で緻密に接合して間詰石がない。築石の大きさも概ね揃い、落し積みに統一されている。櫓台の北に元の本丸東辺石垣との接合部があり、その下半部は以北の旧石垣と食違いの段となっている。つまり新石垣の下半部は元の櫓台石垣をそのまま残して前面に積まれているのに対し、頂部付近は旧石垣の崩落を受けて、新石垣から以北の旧石垣に一連の面として擦り付けた状況が見てとれる。なお、櫓台北東から東に延びる段石垣との［Ｐ］入隅や櫓台南の［Ｎ］入隅も旧石垣と新石垣との間にも縦方向の界線が観察でき、新石垣の裏に旧櫓台石垣下半が埋込まれているという見方を支持している。この場所は慶長年間の内に修理があった記録があるが、石垣遺構の年代観は江戸後期から明治である。

以上は石材全体の加工度が高く、特に隅石は全面がノミ加工された切石で大きさ、形が揃い、算木積が徹底され、後述の慶長の築城期石垣にはみられない特徴をもつ。規格が揃った石材による落し積みは一般には江戸中期以降、とりわけ後期から明治にかけて盛行する技法[9]で、城郭では佐伯城本丸付近（大分県佐伯市）や岡城中枢部（大分県竹田市）、人吉城（熊本県人吉市）などに残る。出雲地域では安政６年（1859）に完成した清水寺（安来市清水町）三重塔の関連石垣、一畑寺（出雲市小境町）大書院付近の高石垣などで多見でき、松江城内で確認できる落し積みも基本は江戸後期のものであろう。いっぽう本段西辺中部の石垣は最も古相で、築城期に続く17世紀代に遡る可能性もある。ここに示した新様式の石垣の細かな年代比定は、類例との比較作業と共に、今後の課題としておきたい。

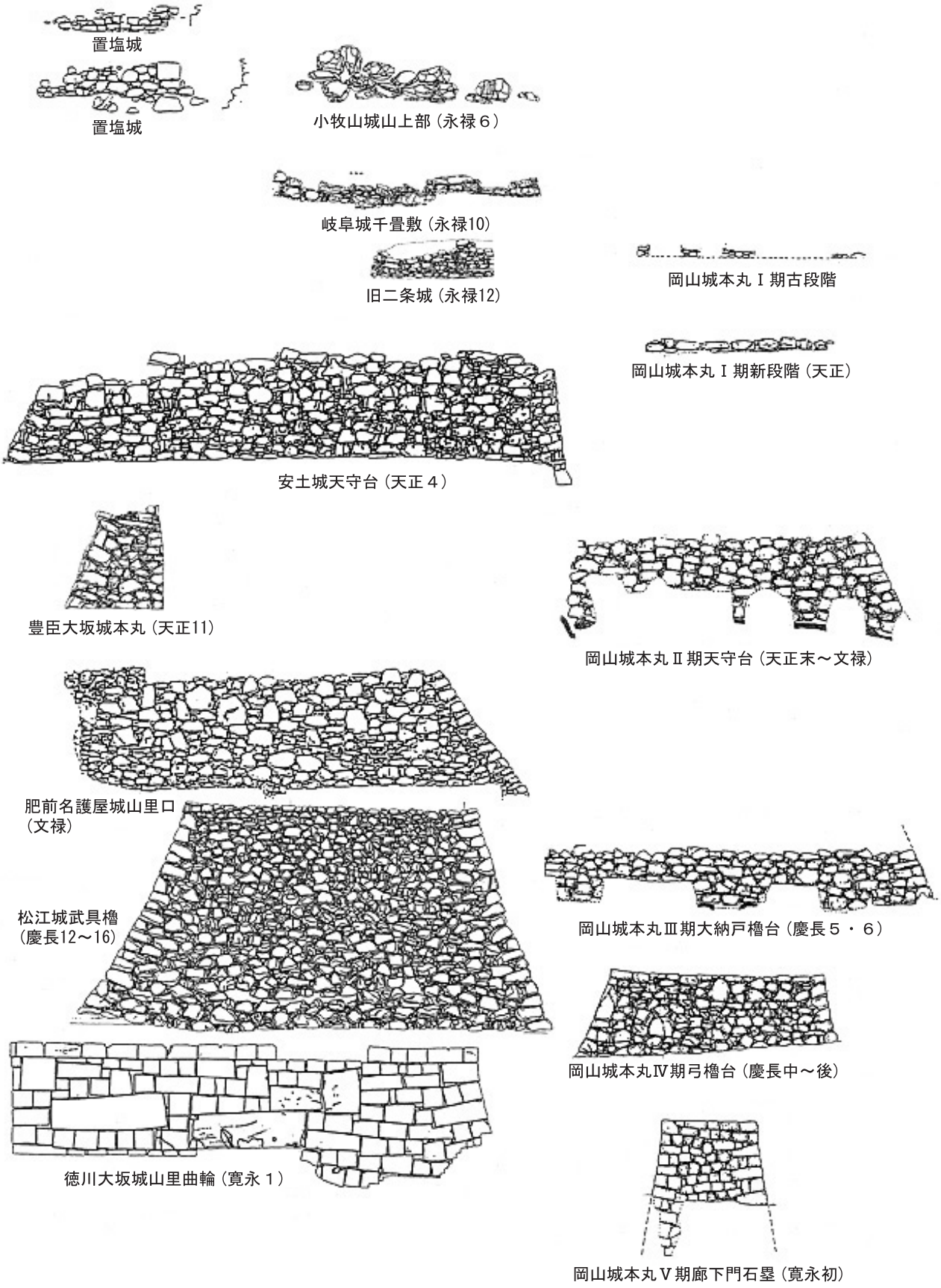


図３　各地の城の石垣の変遷　（各報告書から作成）

いずれにせよ、現況で確認できる絵図や文字史料に伝わらない積み直しが相当にあったことは疑いない。幕府に届出はしたが、史料としては現存していないということだろう。二の丸太鼓櫓～中櫓の石垣は恐らく江戸後期に基底付近から根本的に積み直されていることになり、両櫓やその間の土塀は築城期に建てられたものとしても、解体修理的な建て直し、あるいは曳家工法的なもの含めて相当な改修を経ているとしか考えようがない。石垣の積み直しの契機が石垣の崩落であったとすれば、櫓の建築にも相当な被害があったものと思われる。本丸西辺中部の鉄砲櫓も同様である。また、祈祷櫓は現石垣の構築が櫓が撤去された明治維新の以後[10]か以前かで見方が異なるが、江戸時代の内だとすると、新様式の石垣の背後に旧櫓台石垣が埋め込まれているのは、上に建つ櫓の建築を一部なりとも温存させながら石垣修理ないしは補強を行なったことの裏返しと評価する途もある。

新様式の石垣の多くに共通するのは元の石垣の基底を残していることである。特に二の丸南東の高石垣はもう１～２石外せば、一から積めてより堅固な石垣になるはずなのに、そうはしていない。工程上基準となるものは残す、恐らく幕府への説明のタテリとして、新規構築ではなく、あくまで「修理」・「復元」という名目にこだわった結果と考えられないだろうか。現代の発掘調査や史跡整備において、元位置を保った礎石は動かすな、石垣上部は解体するとしても根石は動かすなという発想に通じている。

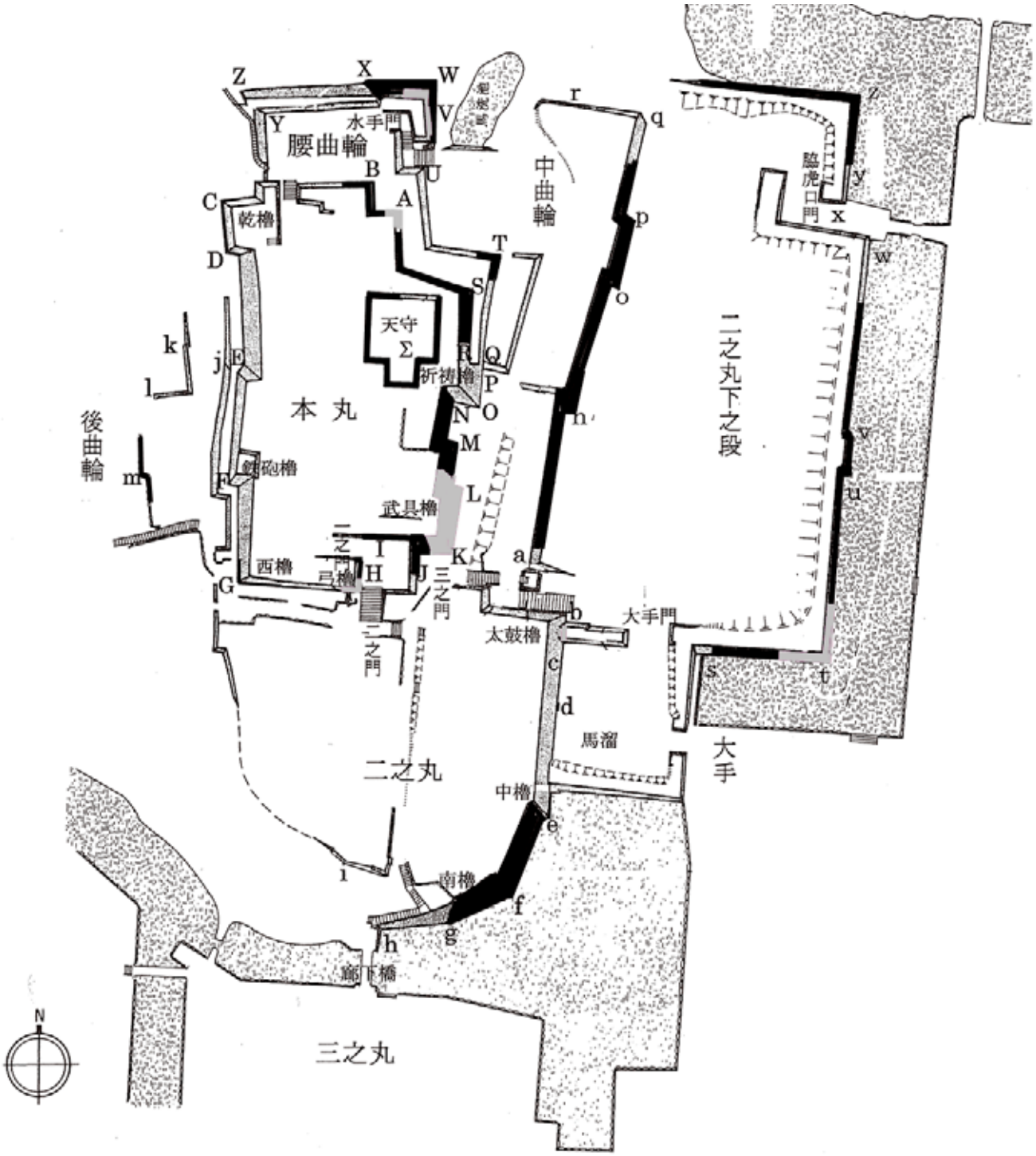
２．堀尾氏による慶長築城期の石垣

⑴　大枠としての年代観の検証

近現代の記録に残る修理個所や新様式の石垣、それに石材の乱れなどから判るその他の修理個所を差し引き、さらに以下に述べる石垣の編年観に照らした特徴から、慶長年間の堀尾氏築城期の石垣構造を概ね保っているとみられる部位を抽出すると**図４・表１**の様になる。

これらの石垣の石材は、幅10㎝を越えるような幅広の矢穴痕が列をなす割石を一定量含み、隅石などごく一部の石材の一部分にノミによる面加工を施すものを含みながらも切石と言えるものではないし、隅石・築石とも形や大きさに振幅があり、石材の規格化が大いに進行しているとは言い難い。また隅角部は算木積みを明らかに指向するが、形や大きさ、加工度や積み方の上で、隅脇石は一般部築石に対して特化していない。一般部築石は横積み優位な場所もあるが、かなり乱積み（**図７－４・５**）が優位で、横方向に長くメジを通す布積みではない。さらに築石同士の接地点は石垣面ではなく、やや奥に入った場所で、石垣面における築石の隙間には間詰め石を多用している。高さ10ｍを越えるような高石垣が群在し、一定の傾斜で直線に立ち上がるものを含みながらも、反りを持つものがある。こうした特徴は、慶長期の他の城郭石垣と大枠として共通する。すなわち北垣聰一郎氏の石垣編年[11]ではⅡ期の１に位置づけられるものである。現に同氏は松江城の天守台と武具櫓（近年の解体修理前）の石垣を築城期の石垣として記述している。ここに示した石垣は大まかな城郭石垣の変遷（**図３**）に照らして、慶長12～16年のものと考えて矛盾ない。

加えて、これらを堀尾氏築城期の石垣と考えることについて、もう少し細かな個別要素に着目してみると、例えば松江城で多見される扁平な隅石の二番目に長い辺（幅）を天地にとって積む（以下、横立隅石と仮称する）は、古くは16世紀中葉の観音寺城（滋賀県近江八幡市）や1590年代の肥前名護屋城（佐賀県唐津市）にもみられ、慶長14年（1609）築城の名古屋城で多見される。しかしそれ以後の城郭石垣ではあまり見かけない。また、松江城［Ｉ・Ｈ］本丸一の門脇やその向の弓櫓下、あるいは［ｓ－ｔ間］二の丸下の段南辺で確認できる石垣中位で普通大の築石に交えて複数の大石を散在させるタイプの意匠石垣（**図12**）も、古くは肥前名護屋城にあり、慶長期では古い姫路城ぬの門前のほか、松江城と同時期の名古屋城までは目立っているが、やはりその後は見かけない。さらに、松江城では石材へ点彫りの刻印が大



■＝該当部（但し頂部等は一部に改修あり）
■＝近年に解体修理を受けたが分析可能部

図４　堀尾氏築城期の現存石垣の分布

量に施されているが、刻印が多用され始めるのは慶長年間半ばからで、それ以前は墨書中心であった。しかも刻印の導入当初は点彫りであったものが、元和・寛永期になると線彫りが主体となるという[12]。逆に言えば松江城の点彫刻印は、地点を跨って図形もしくはその組み合わせが共通することも勘案すると、堀尾氏築城期に切り出された石材に限られる可能性が強い。後に積み直された石垣への流用石材にはあるが、新様式の石垣の新規調達材には、先の安永八の年銘を例外として、刻印は見られない。

⑵　同時期他城と比べての特徴－保守性－

築城期石垣（**表１**）の特質を理解するため、より微細な次元で同時期他城と比較した特徴を考える。各城とも築城期石垣に限っても場所による違いが多少なりともあるが、ここでは総体として比較する。

慶長年間は全国各地で築城ラッシュがあった時代である。慶長５年（1600）の関ヶ原合戦後の大名配置を受けたもので、中国地方近隣では池田輝政の姫路城、森忠政の津山城、毛利輝元の萩城、細川忠興の小倉城などが構築されたし、池田忠継の岡山城や福島正則の広島城、生駒一正の讃岐高松城などでは前代の構造をかなり温存しながらも大掛かりな改修が行なわれた。その多くは関ヶ原合戦直後に着工されているが、松江城は同じ慶長年間でもそれらより概ね数年遅れて着工されたという特徴をもつ[13]。松江城と全く同時併行で築城された例として、名古屋城や丹波篠山城がある。ともに慶長14年（1609）の築城で、徳川幕府主導の天下普請によるものである。第一に比較すべき石垣はこうした慶長期の城石垣である。

先ず石材については、松江城では矢穴を伴う割石を一定量含むが、部位によっては丸味を持った自然石が相当に多いし、方形度が低く、ノミなどによる面加工を施したものもごく僅かで、形や大きさについての規格化がさほど進んではいない。名古屋城や丹波篠山城と比べるとその差は歴然であるが、松江城よりも古い姫路城・萩城・小倉城などと比べても当てはまる。隅石はそうした他城の先進的な部分では既に長方体化の傾向を強め、ノミやハツリによる面加工が石垣表となる全面に及んでいる。城門部脇の石垣ともなればその傾向はいっそう強い。対して松江城では長方体傾向のものはあるが、整ったものは少ないし、形や大きさの上でのバラツキがある。これは隅石の長さ、つまり長辺／短辺の数値の違いにも表れ、慶長中～後半の多くの他城石垣では２を上回るものが多いのに対し、松江城では２前後ないしはそれを下回るものが中心となる。松江城の石垣は隅石の左右への喰い込みが弱く、強度的に不利ともいえる。隅石のノミによる調整も松江城のものは個体数が少なく、天守台など極めて限定的な個所に限られ、あるものでも石材のごく一部分のみである。特に石垣隅角部の稜線の先鋭化に関わるものが殆んどない。隅石だけでなく、一部の築石もそうであるが、他城の矢穴を伴う割石は石材の多面が割り面となっていて、母岩を自在に割って方形度の高い形と適当な大きさの石材を得ているのに対し、松江城の割石は丸い自然石を単に割っただけで、他面には自然面を残すものも多く、方形の形を得るというより、凡その大きさを得るために割ったというニュアンスのものも多い。

積み方では松江城では天守台を始め中曲輪や二の丸下の段の一部の隅角では強く稜を通すが、石材の加工度の低さと相俟って、慶長期、ましてやその後半の他城に比べると稜線の通りが弱いものが多い。名古屋城（**図７－１・２**）や丹波篠山城、またそれより古い姫路城、小倉城などでは各所の隅角とも鋭い稜を通すのとは対照的である。なお、松江城では弱い部分といっても稜を通そうとする意識は窺え、隅角の下部では稜が弱く丸味をもった石材を配しても、上部は稜の強い石材を集中的に配して見かけの体裁を整えた類型が指摘できる。こうした技法を、**表１**では「下丸上稜」と示した。同じ堀尾氏が先行して関わった二股城（静岡県浜松市）・富田城（島根県安来市）で認められる。また萩城荒川櫓（**図７－６**）にもあるし、その他の慶長期ないしそれ以前の城にもありそうであるが、堀尾氏関連の先行城郭の石垣にみられることは注目される。

表１　石垣属性分析表

	部　位 ＊松江城のアルファベット等は図４ほかと対応		隅石算木積み（長辺の左右振り分け） ＊現況で観察可能な最下方の隅石から上方に向かって順に記述。R：長辺右、L：長辺左、M：左右への振り分け不明瞭（石材の長短辺差が少ない）、MR・ML：同左も振り分けの傾向あり、R・L：石材の2番目に大きい辺を縦に取るもの（横に立てる）、斜体字・太字：算木積が乱れる個所。なお、天端付近の隅石は後の積み直しを受けた可能性をもつものも含めている。	高さ ［概数］
松江城	Σ１	天守台南西隅	？－M－L－L－R－L－R－L－R－L	7.5m
	Σ２	天守台北西隅	L－R－L－R－L－R－L－R－L	7.5m
	Σ３	天守台北東隅（解体修理？後）	R－L－R－L－MR－L－M－M	6.5m
	Σ４	天守台南東隅（解体修理？後）	L－R－L－R－L－R－L－R	7.5m
	Σ５	天守付櫓南西隅	L－R－L－R－L－R	5ｍ
	Σ５	天守付櫓南東隅	？－R－L－R－L	5ｍ
	A	本丸北東隅南（解体修理前）	M－L－R－L－R－M－M－M－R－L	6ｍ
	B	本丸北東隅北	M－L－L－MR－L－R－L－R	5ｍ
	D	本丸乾櫓南西隅	R－L－R－L－R－L－上部新	9ｍ
	H	本丸一の門南弓櫓北隅	R－L－MR－L－R－新M―新M	4ｍ
	I	本丸一の門前北	Rカ－L－R－L－M－M	4ｍ
	K	本丸武具櫓南隅（解体修理前）	R－R－L－R－M－R－L－R－L－R－L－R－M－R－L－R－L－M－L	12m
	L	本丸武具櫓北隅（解体修理前）	L－R－M－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－M－R－L－R－L－R	12m
	M	本丸武具櫓－祈祷櫓間出隅	R－L－MR－ML－R－M－M－M（L）－M－L－R－L－R－L－L－L	11m
	S	本丸東辺北隅	L－R－L－L－R－L－R－L－R－L－R－L	6ｍ
	T	中曲輪上段北東隅	R－L－R－L－R－L－R－L	4ｍ
	W	腰曲輪北東張出北東隅	？－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－M－L－R－L－R－L－R－L	11m
	X	腰曲輪北東張出北西隅	？－L－ML－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L	11m
	f	二の丸南東鍵形出隅	R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－（天R）	14m
	g	二の丸南櫓南東隅	L－R－L－R－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R（天）－L－R－L－（R－L－R－L－天）	14m
	m	後曲輪中南出隅	L－R－L－R－L－R	3ｍ
	n	中曲輪東辺中部出隅	M－R－L－R－L－R－L－R－L－M－M－L－R－L－R－L－R－L	9ｍ
	o	中曲輪東辺北部張出南	R－L－R－L－R－ML－R－ML－R－L－R－L－R－L－R－L－R	8ｍ
	p	中曲輪東辺北部張出北	R－M－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L	8ｍ
	t	二の丸下の段南東隅（解体修理報告）	R－R－L－R－L－R－M－R－L	6ｍ
	u	二の丸下の段東辺中部張出南	R－L－R－L－R－ML－R－L－R－M	6ｍ
	v	二の丸下の段東辺中部張出北	M－L－M－L－ML－L－R－L－R－L－M	6ｍ
	z	二の丸下の段北東隅	M－R－L－R－M－R－L	6ｍ
	a	大手筋中曲輪南端石塁		3ｍ
	x	二の丸下の段脇虎口南		3ｍ
堀尾氏関連城		富田城山中御殿平菅谷口内石塁	R－ML－R－L－新修理３石	4ｍ
		富田城山中御殿平北隅	R－（M）L－R－L－R－欠	4ｍ
		富田城山中御殿平旧大手門東（改造部旧隅）	R－L－R－L－R－L－R－L－上２石で埋め	4ｍ
		富田城千畳平北張出北隅	L－R－L－M（立石）	3ｍ
		富田城千畳平北張出西隅	L－R－L－R－L－L－M－M－R	4ｍ
		二股城天守台南東隅	R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R	4ｍ
		二股城天守台南西隅	L－MR－L－MR－L－R－L－M	4ｍ
		二股城天守台北東隅	L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－ML	4ｍ
		浜松城天守西曲輪西隅	R－M－R－L－R－L－R－L－R－？	5ｍ
		浜松城天守曲輪東門南東隅	L－R－L－R－L－R－L	5ｍ
		黒井城本丸南虎口下南隅	？－L－R－L－R－L－M－L－R－M－L－R	5ｍ
		黒井城南方曲輪先端南東隅新	L－R－L－R－L－R－ML－R－L－R－L	4ｍ
		黒井城南方曲輪先端南東隅古	R－L－R－L－R－L－R－L－Rカ－L	4ｍ
慶長中～後期諸城		名古屋城天守台北東隅	R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L	22m
		名古屋城本丸巽櫓南東	L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L	15m超
		丹波篠山城天守台東北隅	L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R	15m超
		彦根城天守付櫓北隅（修理後？）	R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L	7ｍ
		彦根城天守台南隅（修理後？）	L－R－L－R－M－R－L－R－L－R－L	5ｍ
		彦根城天守台東隅（修理後？）	R－L－R－L－R－L－R－L	4ｍ
		彦根城北西登石垣中位北隅	R－M－M－ML－R－L－R－L－R－M	3ｍ
		姫路城天守台南東隅	L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L	18m
		姫路城小天守台南西隅	L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L	7ｍ
		讃岐高松城天守台北西隅上段	L－R－L－R－L－R－L－R－L	4m
		讃岐高松城天守台北東隅	L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R	15m
		広島城天守台北西隅	L－ML－ML－L－R－L－R－ML－R－L－R－L－R－R－M－MR－L－R－L－L－R	8m
		広島城天守台南西隅	L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－ML－R－L－L－R－L－R－L－M	8m
		岡山城本丸下の段太鼓櫓南西隅	？－L－R－L－MR－R－MR－L－R	7.5m
		岡山城祖廟曲輪南西隅	L－R－L－R－L－R－L－R－L－R－L	6m

＊数値は厳密な計測に基づくものでなく、目測概数も多い

法・反り	稜線通り	稜線通りの部位差	隅石の長辺／短辺（築石部・隅脇への食込み度）［概数］	隅石の角の有無・矢穴の有無（割石か自然石か）	隅脇石特化	築石の角の有無・矢穴の有無	隅石ノミ加工	築石ノミ加工	一般部積み方	備考
直線	中～強	下丸上稜	１．２～２	角石	なし	角石・矢穴多～自然丸	○	○	乱～横積み	
直線	強		１．２～２	角石・矢穴	なし	角石・矢穴多	○	○	乱積み	
直線	強		１．２～２．５	角石・矢穴	なし	角石・矢穴多	○	○	横～乱積み	
直線	強		１．３～２．５	角石・矢穴	なし	角石・矢穴多	○	○	横～乱積み	
直線	強		２程度	角石・矢穴	なし	角石・矢穴多	○	×	乱積み	
直線	強		１．２～２	角石・矢穴	なし	角石・矢穴多	○	×	乱積み	
直線	弱		１～１．５	自然丸	なし	自然丸石	×	×	乱積み	松江市教委2007
直線	極弱		１．２～１．５	自然丸	なし	自然丸石	×	×	横～乱積み	
	弱	下丸上稜	１．２～３弱	角石、自然丸	なし	角石、自然丸	×	×	乱～横積み	
直線	中			角石	なし	角石・一部矢穴	×	×	大石含む立石～横積み	
直線	中			角石	なし	角石	×	×	大石含む横積み	
反り	中		１．２～２以下主体	角石	なし	角石・一部矢穴	×カ	×カ	横積み	松江市教委2007
直線（上やや急）	中		１～２	角石	なし	角石・一部矢穴	×カ	×カ	横積み	松江市教委2007
反り	中		１～１．５主体	角石・一部矢穴	なし	自然丸石、一部角石・矢穴	×	×	横積み	
直線	弱	下丸上稜	１．５～３	角石	なし	自然丸石、角石	×	×	横積み	
直線	弱		１．３～２主体	角石・一部矢穴	なし	自然丸石、角石	×	×	横積み	
上部弱い反り	中		１～２	角石	なし	自然丸石、角石・矢穴少	×	×	乱積み	
上部弱い反り	中		１．３～２．５	角石	なし	角石・一部矢穴	×	×	横積み	
反り	弱～中	下丸上稜	１．５×２．５	角石・一部矢穴	なし	角石・一部矢穴	△	×	乱～横積み	
反り	中		２前後	角石	なし	角石・一部矢穴	△	×	横～乱積み	
直線	極弱	下丸上稜的	１．２～２	自然丸	なし	自然丸石、角石・矢穴石極少	×	×	横積み	
反り	中～強	下丸上稜的	１～３	角石・一部矢穴	なし	角石・一部矢穴	△	×	横～乱積み	
反り	中～強	下丸上稜	１．３～２	角石・一部矢穴	なし	角石・一部矢穴	△	×	乱～横積み	
直線（反り弱い）	中～強	下丸上稜	１．５～２．５	角石・一部矢穴	なし	角石・一部矢穴	△	×	横積み	
直線	中		１．５～２	角石・一部矢穴	なし	角石・一部矢穴	△カ	×カ	横積み	松江市教委2007
直線（頂部跳ね）	強		１．２～３	角石	なし	角石・一部矢穴	△	×	横～乱積み	
直線（頂部跳ね）	強		１．３～２，５	角石・一部矢穴	なし	角石・一部矢穴	△	×	横積み	
直線	中		１．３～３	角石、自然丸	なし	自然丸石、一部角石	×	×	乱積み	
	強		—	角石・矢穴	なし	角石・一部矢穴	○	△		
	強		—	角石	なし	角石	△	△		
直線	中		１．３～２，５	角石	なし	角石（矢穴なし）	×	×	横積み・立石	
直線	中	下丸上稜	１．５前後	角石	なし	角石（矢穴なし）	×	×	横積み	
直線	強		１．５～２前後カ	角石	なし	角石（付近に矢穴僅か）	×	×	横積み	
直線	強		１．３～２	角石	なし	角石（矢穴なし）	×	×	横積み	
直線	中		１．２～２	角石	なし	角石（矢穴なし）	×	×	横積み	
直線	中	下丸上稜	１．２～３	角石	なし	角石（矢穴なし）	×	×	横積み	
直線	中		１．２～２	角石	なし	角石（矢穴なし）	×	×	横積み	
直線	中		１．２～２．５	角石	なし	角石（矢穴なし）	×	×	横積み	
直線	中		１．２～２	角石	なし	角石（矢穴なし）	×	×	横積み	
直線	中		立石、１．２～２	角石	なし	角石（矢穴なし）	×	×	横積み	
直線	中		１～２．５	角石	なし	角石（矢穴なし）	×	×	横積み	
直線	中		１．５～２	角石	なし	角石（矢穴なし）	×	×	横積み	
直線	中			角石	なし	角石（矢穴なし）	×	×	横積み	
反り	強		２強	角石・一部矢穴カ	△	角石・矢穴多い	◎	△カ	横積み	
反り	強		２～３	角石・一部矢穴カ	△	角石・矢穴多い	○	×カ	乱積み	
反り	強		２．２～３	角石・一部矢穴カ	○	角石・一部矢穴	◎	△	乱積み	
弱い反り	強		１．３～３	角石・矢穴	なし	角石・一部矢穴	×	×	横～乱積み	
弱い反り	強		１．３～２	角石・矢穴	なし	角石・一部矢穴	×	×	横積み	
弱い反り	強		１．２～２．５	角石・矢穴	なし	角石・一部矢穴	×	×	横積み	
直線	中		１．３～２，５	角石	なし	角石（矢穴なし）	×	×	横～乱積み	
上部弱い反り	強		２～２．５	角石	なし	角石・一部矢穴	◎	○	乱～横積み	
上部弱い反り	強		１．５～２．５	角石・一部矢穴	なし	角石・一部矢穴	◎	×	乱積み	
弱い反り	強		２～３	角石・矢穴	なし	自然丸石、角石・一部矢穴	○	×	横～乱積み	
反り	強		２～３	角石・矢穴	なし	自然丸石、角石・一部矢穴	○	×	横～乱積み	
反り	強		２以下多、一部３	角石・	なし	角石、丸石・一部矢穴カ	◎	◎	横積み優位	天正末説もあり
反り	強		２以下多、一部３	角石・	なし	角石、丸石・一部矢穴カ	◎	◎	横積み優位	天正末説もあり
反り	中		１．３～２．５	角石	なし	自然角石	×	×	横積み優位	
反り	強		１．５～２．５	角石・一部矢穴	なし	角石・一部矢穴、自然丸石	×	×	横積み優位	

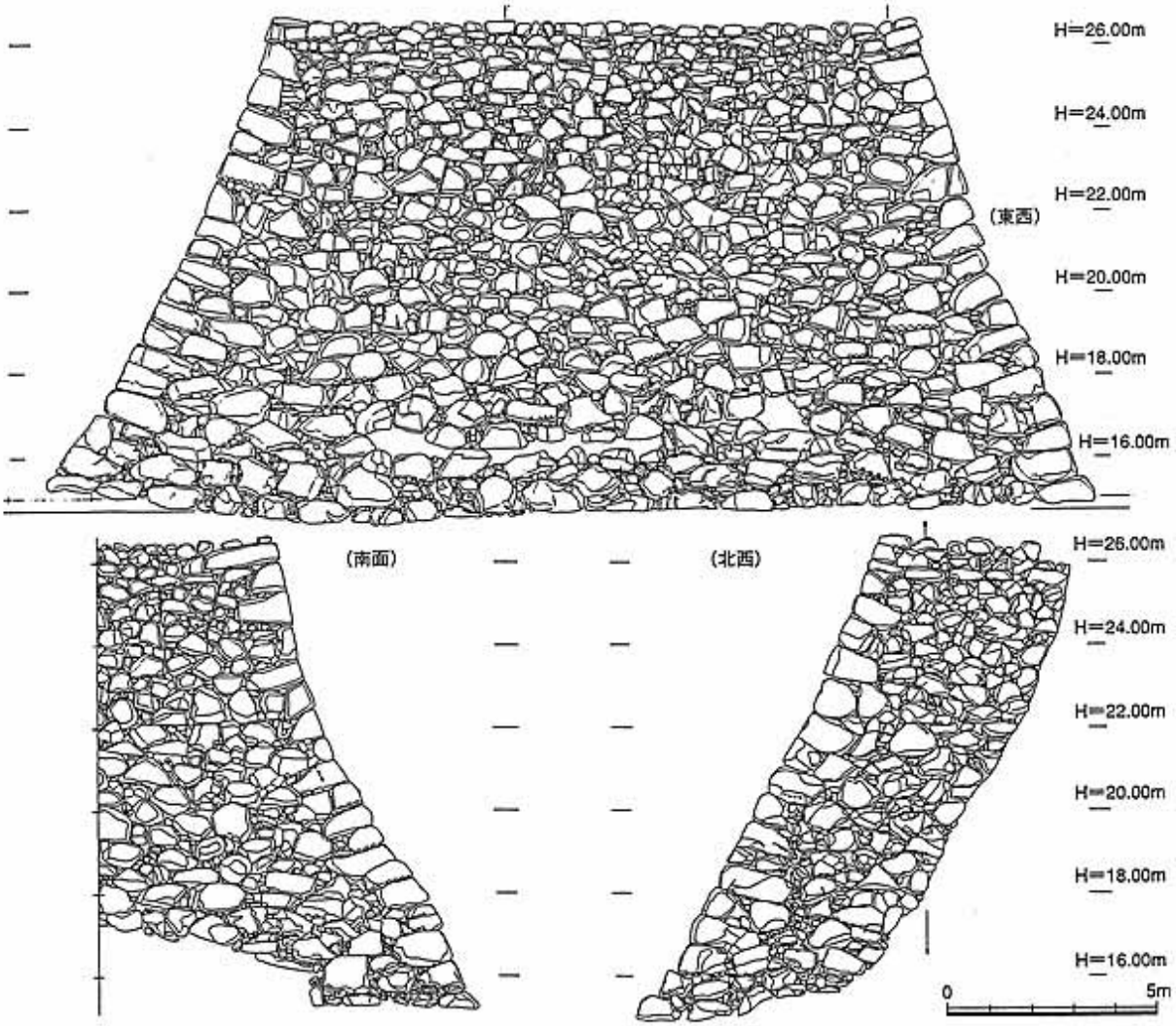


図５　松江城　Ｋ - Ｌ本丸南東武具櫓の石垣　　松江市教委2007から

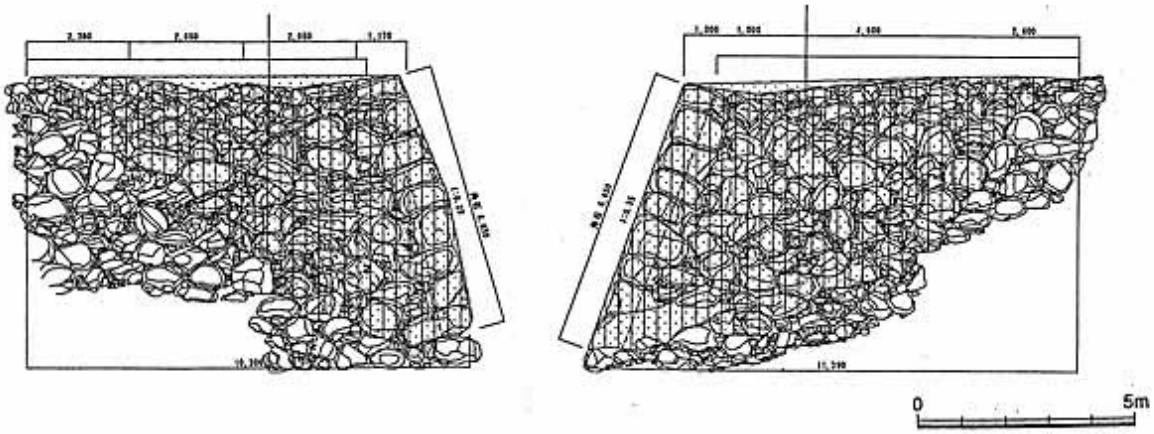


図６　松江城　Ａ本丸北東角石垣　　松江市教委2007から

1．名古屋城　天守台北東隅

2．名古屋城　本丸巽櫓南東隅

3．萩城　天守台南西隅

4．松江城　天守台西面の一般部築石

5．名古屋城　本丸東辺南部の一般部築石

6．萩城　荒川櫓北東隅

7．名古屋城　東辺内堀の外側一般部

8．萩城　本丸北東内石垣出隅

9．讃岐高松城　天守台北西隅

図７　慶長期各城の石垣

次に算木積みについて、松江城では徹底度が低い。**表１**の隅石算木積み欄は各隅角部の隅石長辺の左右の振り分け方向を、Ｒ：右、Ｌ：左、Ｍ：振り分け不明瞭として、下の石材から上に順に書き上げたものである。むろん基本はＲ・Ｌが交互にあるが、たいていが何処かで乱れたり曖昧な部分が含まれている。名古屋城（**図７－１・２**）や丹波篠山城、それに姫路城の池田期の大半の隅角や讃岐高松城天守台（**図７－９**）などでは振り分けが徹底しているのと対照的である。松江城の算木積みにやや不徹底な個所を残す状況は、広島城や岡山城、それに堀尾氏の松江城前段の富田城など中国地方の大名居城にもあるが、大局的には慶長半ば以前の諸城と共通する。つまり算木積みは天正から慶長期に向けて整い徹底してくる技法である。そのほか、名古屋城や丹波篠山城では隅脇石が形や加工度、大きさや積み方の上で一般の築石から特化するが、松江城ではそうした傾向は窺えない。

さらに、慶長期の他城、ましてやその後半期のものになると、高さ５ｍを越えるような高石垣では立ち上がりに反りを持つものが普遍化してくるのに、松江城では確かに反りをもつものもあるが、なお直線で立ち上がる高石垣を含んでいる。また、反りがあるものでも、美しいカーブを描くというよりは、直線が基本で折れを持って立ち上がる傾向があったり、ぎこちない趣のものが多い。

その他、先述の横立隅石、石垣中位での大石群配置などもむしろ前代から続く古い要素といえる。

⑶　松江城築城期の特色ある石垣の背景

松江城築城期の石垣は確かに慶長期の特徴をもつが、うちでは同時期他城と比べて古式の要素を多くもつ。理由は直ちに特定できないが、様々な要因が複合したに違いない。可能性を考えてみる。

一部に割石も含むとはいえ野面を残し大小不定形で、武骨な石材を豪壮に積み上げた石垣は、安土城・大坂城・聚楽第・肥前名護屋城・石垣山城といった信長・秀吉の居城の定番であり、事実上の松江城の築城主体者であった堀尾吉晴[14]の前任地の浜松城の石垣も然りであった。松江城の石垣が古風なのは豊臣恩顧の大名であった吉晴の石垣に対する理念型に従ったという可能性である。それは慶長後半という年代にも関わらず、先行する豊臣期に多用された黒い下見板を張った望楼形天守を建てたことと、浜松城と同じく松江城でも天守地下に井戸を設けたという保守性に通じるかも知れない。また、石垣は機能さえ果たせば、さして手間や経費をかけなくても良いといった価値観も作用している可能性もある。

次に、堀尾氏は松江城以前には大規模な城郭、あるいは矢穴を伴う割石を駆使した石垣構築の経験が薄いことが浮かぶ。構築主体が吉晴との特定はできないが天正10年（1582）に城主となった黒井城（兵庫県丹波市）の石垣に矢穴はないし、前任地の浜松城やその支城であった二股城は、石材が割石作業に適さないチャートであることが恐らく影響してやはり矢穴はない。出雲入国直後に一旦居城として整備された富田城では矢穴を伴う石材は山中御殿で１石が確認できるのみである。最も影響が大きいと思われるのは、吉晴は文禄慶長の役では後方支援に廻って参戦渡海しておらず、矢穴を伴う割石を本格的に駆使した高石垣を全国で初めて築いた肥前名護屋城や韓半島の倭城の造営工事に参加していないことである。逆に関ヶ原合戦後に割石積みの高石垣を築いた西国大名の多くは、そうした城の石垣を築いた経験をもつ[15]。さらに、堀尾氏は松江城築城と併行する慶長12年（1607）の駿府城の造営には動員されているが、名古屋城や丹波篠山城の築城にも参加していないのである。堀尾氏の松江城築城以前での最先端の城郭石垣構築に関する経験の低さが、自前のノウハウの醸成を促さず、松江城で初めて自身が主体的になって矢穴を伴う割石を本格的に採用し、算木積を指向する高石垣を林立させ始めたものの、全体として最先進性を取り込むことができず、古風な石垣の構築に繋がったという側面である。また、直接の技術者という点では、松江城の石垣構築に際して近江から二人の穴太を招聘したという伝承があり[16]、事実としてあったのなら、その技術の保守性が作用した可能性もある。

最も大きな要因を占めそうなのが石材種の問題である。松江城築城期の石材は、忌部石とされる複輝石安山岩、矢田石とされる角閃石粗面玄武岩、大海崎石とされる角閃石粗面安山岩などからなる[17]。これらの石は物理的特性として、矢で単に割ることは出来ても、整った方形の石材として採ったり、全面にノミ加工やハツリを施して形や面を整えるのが難しかったとみられる。また、忌部石や矢田石は一部に自然面を残すものが多いことから、母岩を割って採集というより、転石を採集したものが多いとみられるが、思い通りの大きさの石が採れなければ、半分に割るよりは野面のまま使うしかない。いっぽう大海崎石は、矢で割った面だけでなく、採集時の単なる打撃で割れた面や場合によっては自然面でもシャープで、角も鋭く、上手く言えば時代相にマッチした石材となる。しかし形や大きさを揃えるのはやはり難しい。こうした異なる特性をもった石材が混合して使われた、というより使わざるを得なかった事が、松江城の石垣の多様性を生み出し、またいっけん古相のものを含む結果に繋がった側面があるだろう。もし松江城近郊で、他の近世城郭の石垣で良く使われる花崗岩が豊富に採れたら、石垣の様相はかなり違っていたかも知れない。ちなみに、松江城築城との前後関係は必ずしも明らかでないが、出雲における堀尾氏の慶長期の支城である三刀屋尾崎城（島根県雲南市）の石垣[18]では近隣で採れる花崗岩を用い、矢穴痕も多見されるが、石材の平滑度や方形度は松江城より高いものを含んでいる。

なお石材を糸口に視点を変えると、複数の石材の特性を上手に活かしながら、実効面では十分に機能しうる石垣を構築し得た臨機応変さや技術力は、石垣構造から浮かぶ古相感とは裏腹に、むしろ新進気鋭なものとして評価する途もある。「古式」は時代遅れでなく、また他城の平均値に合わせるのではなく、堀尾氏は個性溢れた城石垣を築いたという観点である。浜松城でのチャート使用を考えると、堀尾氏は伝統的に固い石材あるいは花崗岩以外の石材の扱いに長けていて、確かに松江城でも発揮された。

⑷　松江城内の場所による違い

同じ城で同じ時期に積まれた石垣でも、場所によって構造が異なることがある。慶長期に限っても、例えば岡山城では本丸では自然石主体の豪壮な石垣が、二の丸内屋敷では矢穴を伴う精緻な割石積みの石垣が一時併行して構築された可能性があるし[19]、萩城本丸では矢穴を伴う割石積みの新相石垣が主体であるのに、本丸東北部の石塁石垣などは自然石のみを用いている（**図７－８**）。また、角がシャープな割石に完全に統一されているようにも思える名古屋城でさえ、内堀の外側、いわゆる水敲石垣の一部などは丸味をもった石材を交えている（**図７－７**）。

松江城中枢部は縄張りや空間構成に関わって東ないしは南への正面性の問題が指摘されている[20]が、石垣に即して考えてみる。先ず高さと分布密度では、明らかに南東と東向きのものは高くて濃密であるのに対し、西と北向きは低くて疎である。各方向の石垣段数に着目すると、特に東辺方向は天守台を含めて最大６段にもなる。松江城で最も高い石垣は堀に面する［ｆほか］二の丸南東部で約14mある。続く二の丸東部で約12m、本丸南東の［K−L］武具櫓でも約12m（**図５**）、［ｎ～ｐ］中曲輪東辺で約８～９ｍ、［ｔ～ｖ］二の丸下の段で約６ｍであるのに対し、北と西方向は約11mの［Ｖ～Ｘ］腰曲輪北西（**図９**）だけが10mを越える程度で、特に西では本丸西辺で６～７ｍ、後曲輪では約３ｍしかない。石垣の高さは裏込めの厚さや反りの有無とも連動している。解体修理が行なわれた［K−L］武具櫓の高石垣は反りがあって２ｍを越える厚さの裏込めがあるのに、その半分の高さの［A］本丸北東隅南では反りがなく、裏込めの厚さは１ｍもない（**図８**）。裏込めの厚さや反りは高さだけでなく、上に直接乗る城郭建物の有無とも連動しているに違いない。また反りは近似する高さであっても東向き石垣のうちでは北に行くほど目立たなくなり、この点でも先進的要素の南東方向への偏在性が窺える。

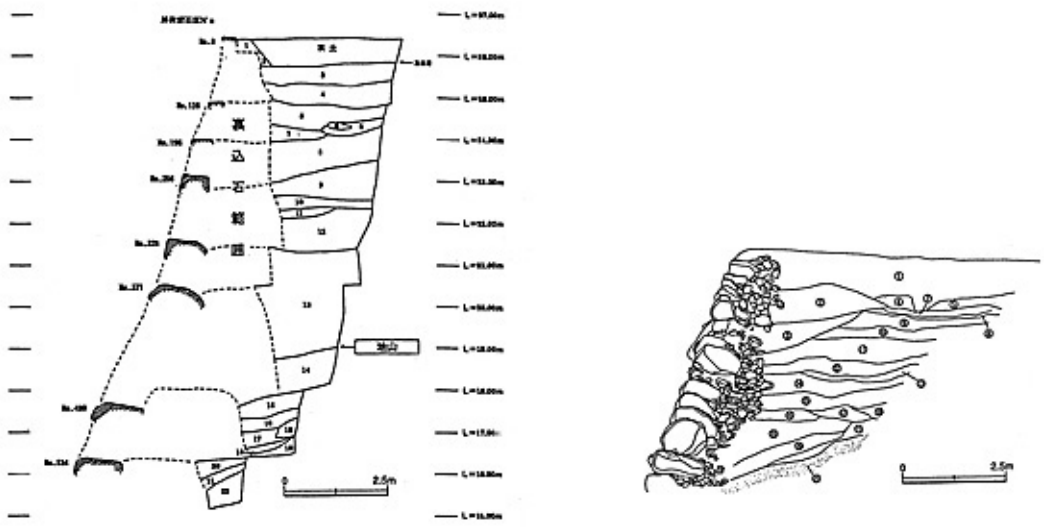


図８　松江城　Ｋ－Ｌ間本丸南東武具櫓石垣[左]とＡ本丸北東隅石垣[右]の断面　　松江市教委2007から

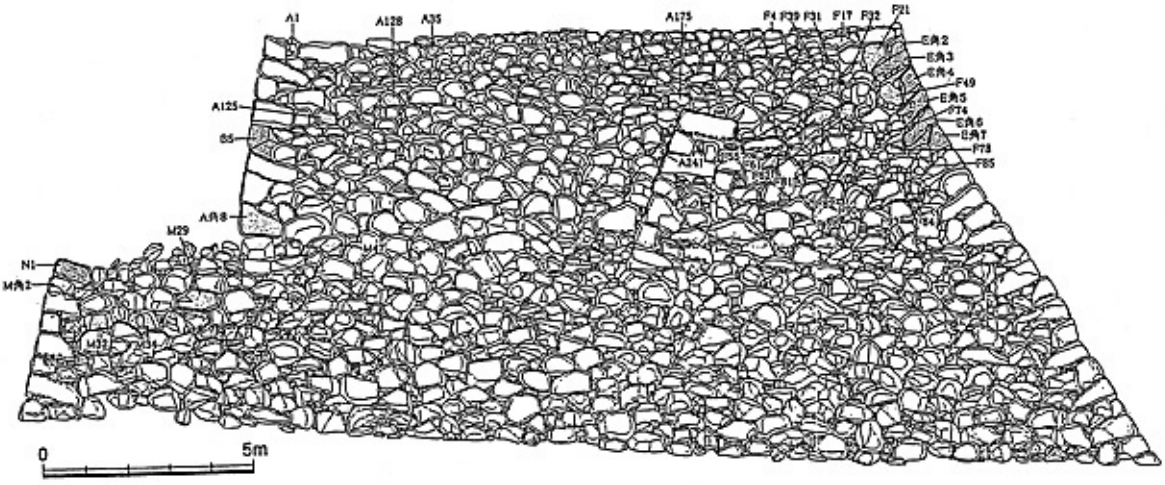
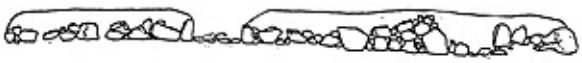


図９　松江城腰曲輪東面石垣　　松江市教委2007から



島根・丸山城（～天正）

福井・一乗谷下木戸

滋賀・安土城大手（天正４）

岐阜・岐阜城千畳敷（永禄10）

広島・吉川元春館（天正19）

東京・八王子城御主殿（天正15頃）

岡山・岡山城本丸内下馬門（慶長）

佐賀・肥前名護屋城馬場（文禄）

図10　各地の城の巨石・立石を組み込んだ門脇の石垣　　各報告書などから作成

1．Σ天守台南西隅

2．ｎ中曲輪東辺中部出隅

3．ｐ中曲輪北部張出北

4．Ｍ本丸武具櫓祈祷櫓間出隅

5．ｕ二の丸下の段東辺中部張出南

6．ｆ二の丸南東鍵形出隅

7．Ｓ本丸東辺北隅

8．ｚ本丸下の段北東隅

9．ｍ後曲輪中南出隅

図11　堀尾氏築城期の松江城石垣

１．肥前名護屋城　山里口南

２．姫路城　ぬの門前脇

３．松江城　本丸一の門前脇

４．松江城　本丸弓櫓台東

５．松江城　二の丸下の段南辺中部

６．名古屋城　三の丸本町門脇

７．岡山城　本丸下の段宍粟櫓付近西面

８．津山城　本丸表鉄門前脇

図12　慶長期を中心とする各城の意匠石垣（石垣中位の大石・立石群配置）

石材も方形度が高い石、また石矢穴を伴う割石、角ばった石、僅かであってもノミ加工を施す石は南～東向きの石垣に顕著であるのに対し、北～西、特に西向きの石垣は自然石や丸味を持った石が卓越する。つまり、選択度の高い石、成形や加工に手間を掛けた石は表の南～東に配し、そうでない石は裏の北から西に廻したということであろう。

南東～東に対する北～西の違いは明瞭であるが、南東方向を向く二の丸石垣と、東向きでも南寄りの本丸・中曲輪・二の丸下の段の石垣の違いにも注目すべきである。高さは前者が圧倒するに対し、方形度が高い石、角が鋭い石、つまり積んだ時に精緻にみえる石は後者の方が多い。これは採用されている石材種[21]の違いとも連動し、南東向きの石垣は忌部石など暗色系の石材が中心であるのに対し、東向きの石垣は灰～薄桃色の大海崎石が圧倒する。つまり南東方向からは豪壮で黒い高石垣、東方向からは精緻な趣で小刻みな段重をとる赤い石垣群が見えるのである。これは軍事的な防禦正面の設定の仕方とともに、南東方向と東方向に対する視覚演出の上での差別化が行なわれたと評価できるかも知れない。あるいは赤い石垣に囲まれた二の丸下の段、黒い石垣に囲まれた二の丸、一の門を含めて南東だけ赤く残りは黒い石垣に囲まれた本丸という括りも出来るかもしれない。石垣構築に当たる技術者や統括者は、石種ごとの特性や石肌の色の違いを認識していた筈で、そうしたコーディネートが計画的に行なわれたとしても不思議はない。なお、三の丸がある真南方向は、石垣の構築状況でみる限り正面性は乏しい。

場所による違いをもう少し細かく見ると、矢穴を伴う割石を最も多く含み、ノミ加工が最も顕著で、隅角に最も鋭い稜線を通すのは、やはり本丸天守台である。天守の建築と合せて最も精力を注ぎ込んだ造作として当然であろう。次に加工度の高い石材、精緻な石垣が明らかに意識的に配されているのは、中枢部南西隅の馬溜から入って、大手門から三之門、二之門、一之門を経て天守のある本丸内に至る大手筋の要所である。大手筋門脇での巨石・立石配置は他城でも古くから確認できる（**図10**）が、松江城は先にも触れた石垣中位に大石群を配す類型のものが認められる。そうした意匠石垣は［Ｉ・Ｈ］本丸一の門の両脇のものが最も顕著であるし[22]、［ｓ－ｔ間］二の丸下の段南辺のものは、馬溜入口から内堀越しに見える位置である。こうした意匠石垣は中小城郭ではあまり見かけず、国持大名としての堀尾氏のステイタスの表示物であろう。さらに大手筋の動線に面する［ａ］中曲輪南端石塁の分銅文刻印は、文様が堀尾家の家紋そのものであり、この個所に一極集中し、しかも他の刻印より大形であることから、堀尾氏の城を印象付けるための特殊な道具立てであったに違いない。そのほか、搦手筋の動線であるが、裏虎口門の石塁でも通路に面するごく一部の石材にだけスダレ状のノミ痕が観察できる。

石垣の分布、規模、構造などにみる多様性と偏在性は松江城の築城期石垣の最大の特徴と言って良い。

おわりに

堀尾氏築城期の松江城の石垣は多種多彩であり、慶長後半という暦年代のわりには一見古相を帯びた部分が多く、場所や方向性による偏差が激しいことを示した。他の城郭と比べて極めて個性的である。それは、堀尾吉晴ないし忠氏の好みや軍事理念をも含めた「築城観」、石垣構築に動員された「技術体系」、使用可能な「石材」の三つのモーメントのなせる業に違いない。だからこそ石垣を読み解くことによって松江城への理解が深まるのである。松江城の石垣観察は面白い。

本稿は平成25年７月13日に行なった松江市史講座での講演内容を元に書き下ろしたものである。概説あるいは問題提起に留まった観があるし、松江城の石垣の大きな特徴である刻印の問題には殆んど触れることができなかった。それでも松江城の石垣の理解への一途になれば幸いである。

注

⑴　ａ：松江市教育委員会(昌子寛光・落合昭久ほか)1995『史跡松江城保存修理事業報告書－二の丸石垣修理工事－』

ｂ：松江市教育委員会（飯塚康行・川上敏朗ほか）2001『史跡松江城整備事業報告書』

ｃ：松江市教育委員会（飯塚康行・藤原幸二・川上昭一・小幡一之）2007『史跡松江城石垣修理報告書』

⑵　文化財保存計画協会1996『石垣調査報告書－史跡松江城跡－』松江市教育委員会

⑶　重要文化財松江城天守修理事務所1955『重要文化財松江城天守修理工事報告書』松江市

⑷　森山英一・三浦正幸1994『日本の城原風景』新人物往来社　など

⑸　元松江市教育委員会文化財課の岡崎雄二郎氏のご教示による

⑹　岡崎雄二郎氏および市史編纂室の山根正明氏のご教示による

⑺　註１ｂと同じ

⑻　岡崎雄二郎・飯塚康行2007「松江城の石垣と産地」『日引』第10号　石造物研究会

⑼　北垣聰一郎1987『石垣普請』法政大学出版局

⑽　註２では明治以後の石垣とする

⑾　註９と同じ

⑿　藤井重夫1982「大坂城石垣符号について」『大坂城の諸研究』名著出版

⒀　山上雅弘2012「松江城の縄張りについて」『松江城研究』１　松江市教育委員会

⒁　堀尾吉晴に関わる事績については、島田成矩1995『堀尾吉晴』今井書店　ほかを参照した

⒂　その意味では、堀尾吉晴の対極にあるのが池田輝政である。輝政は吉晴と同じく文禄慶長の役では参戦渡海していない大名でありながら、姫路城ではいち早く新式の石垣を構築している。慶長期は、石垣に限っても新式と古式が、大名ごと、城郭ごと、同じ城郭でも場所ごとに混在するのが特徴である。

⒃　註14と同じ

⒄　註８と同じ

⒅　中井均2012「堀尾氏の出雲支配における支城について（１）」『松江城研究』１　松江市教育委員会

⒆　乗岡実1998「岡山城の石垣について」『織豊城郭』第５号　織豊期城郭研究会

⒇　ａ：山根正明ほか2012「パネルディスカッション記録　松江城研究報告会「松江城研究の最前線－わかったこととこれからと－」」『松江城研究』１　松江市教育委員会

ｂ：堀田浩之2013「松江城の空間構成をめぐる研究視点の提言」『松江城研究』２　松江市教育委員会

(21)　註８と同じ

(22)　山根正明2009『堀尾吉晴－松江城への道』松江ふるさと文庫６　松江市教育委員会

〔付記〕　その他、松江城石垣の修理や調査、また総合的な知見について、岡崎雄二郎氏、山根正明氏、川上昭一氏、徳永　隆氏をはじめとする松江市教育委員会文化財課の元職員・現職員の諸氏から数多くのご教示を受けた。

（のりおか　みのる　岡山市教育委員会文化財課長）